

天地

ネットワーク テーブル 496号

天地シニアネットワーク 201

9.7.1

TENTĪ TODAY			1
会員の広場 (メール・コメント) 「ベジタリアンの ethics 倫理の問題」 「ある町の高い煙突」「八王子にほんごの会」			2
同 (連載)			3
歴史	米国の統治の仕組みと大統領制、と建国の父たち(9) その5 第5代大統領 ベンジャミン・フランクリン	佐川 雄一	3
論考	中国人から見た日本人の言語表現心理(4) ＜相手に和する＞	兪 彭 年	5
論考	父の愛したハルビン 辛い思い出の旅(1)	加藤 幹雄	7
旅行記	「静聴雨読庵より」(8) プルーストをフランス語で読む	尾関 陽四	10
論考	160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人 その3. この国には貧乏人はいるが荒廃した貧困はない	臺 一郎	11
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		13
事務局			13

TENTĪ TODAY

今回の大阪でのG20、トランプ劇場の一シーンに過ぎなかったのかと思わせるくらいに、最後の北朝鮮金正恩委員長との板門店での再会は、見事なカットでした。中身が無いという批判が強いようですが、首脳同士が互いを信頼しているという姿は、見る人を安心させ、期待を持たせます。生で同時に世界中が見て、知ることができるのは素晴らしいことです。世界が小さくなったと痛感しました。

欧米中心の時代から米中が中心の時代が変わる節目にある今回の会議、日本の役割を安倍首相はよくこなしたのではないのでしょうか。世界が人も主張も新旧交代の時代、まとめるのは難しいというのは予想されたこと。無事に終わり、日本の良き印象をもって、世界の首脳は帰られたようで、良かったと思います。

一方、日本の国内、＜将来への不安＞を思わせる事件が続出しています。一般国民の関心は＜外交より内政＞にあるでしょう。その場しのぎの、口先だけの政策では流れは変えられません。

根本さん推薦(参:会員の広場)の映画・「ある町の高い煙突」を有楽町の

「スバル座」で見ました。原作は新田次郎、日立グループの原点、日立鉱山の操業初期の煙害問題がテーマでしたが、低層の煙突一辺倒の国策に対して、会社、地元が一体になって経営者、国を動かし、150メートルの巨大煙突を建設、煙害を防いだ、という成功物語です。しかし、もし国の政策に拘っていたら、日立のみならず、日本各地の汚染が一段と進み、その後の日本の繁栄はおぼつかなかったと思わせます。

環境汚染は待ったなしの重要課題、煙害（公害）にたいする先駆者たちの死ぬような苦勞を知ることは、環境問題の解決は簡単にはできない、国民一人一人が真剣に考え取り組まないといけない、と示唆してくれます。ぜひお出かけください。シニア割引1100円。

会員の広場（メール・コメント）

天地ネットワークテーブル495号送信有難うございました。また愈膨年氏の著書「了解日本」をお贈りくださり有難うございました。ゆっくりと読ませていただきます。私も今日の英語のクラスでベジタリアンのethics倫理の問題になり、動物を食べることについて考えました。愈氏に習って「了解英米語」のようなものが書けないかを考えております（久保禮次郎）

いつもネットワークをお送りくださりましてありがとうございます。唐突ですが、映画のご推薦を一本させていただきます。

「ある町の高い煙突」という映画が6月22日（金）に一般公開されます。これは生まれ故郷である日立市が舞台です。ドラマは、明治の終わりごろは公害問題が多発していて、日立市郊外にある日立鉱山の煙害もその一つでありました。その煙害解決に市民が取り組み克服するっていう物語です。新田次郎の小説「ある町の高い煙突」が小説の題名そのまま映画になったものです。映画は2時間10分の“大作”、時間を作って是非ご鑑賞ください。

制作費の資金カンパ、10口協力しました。カンパ者の名をエンドロールに出すというので、試写会で最後を凝視したのですが、進みが早くて短く、確認できませんでした。再度鑑賞して確認トライをするつもりでいるのですけど…。根本啓一

小俣さんが元気だった頃、時々事務所に伺わせていただいた内山です。現在、地元で「八王子にほんごの会」に所属し、ボランティアで外国人向けの日本語の指導をしています。会の特徴として、中華系の生徒が多く、約半数を占めています。私自身も2名の中国人留学生を指導しています。

そのような訳で愈先生の著作「了解日本、了解日語」は大変興味深く、有益な本と考えています。つきましては入手いたしたくお願いする次第です。購入も視野に入れていきますので、手段など教えていただけたらさいわいです。よろしくお願いいたします。八王子市 内山 和良

週に一度は国立の母校に行ってバスケット部の練習を見、終わったあと空いている学生（数人）をよんで食事をして話をすることにしています。先週は、気になっていた4年生の就職もほぼ決まったようで安心しましたが、気

になったのは、就職希望の学生の大半が相変わらず大企業に集中しているということ。ベンチャー志向というような学生は殆どいないという寂しい現実です。

超安定企業と思われていた、都市銀行、電力会社、大手電機メーカーなども、時代、環境の変化で、安定、一流の座から滑り落ちた例などから、大企業であっても浮き沈みは避けられない。看板に安心してはだめ、自分を確立し磨くようにと発破をかけることにしています。

<キャッシュレスの時代、ビットコイン、仮想通貨が世の中で大きく騒がれているけどどう思う>と聞いてみたときのこと、<仮想通貨は危ないから手を出しません、関心がありません>という返事が返ってきました。

世の中の変化、先行きなど、無関心な若者の現状に危機感を覚え、敢えて、時間を作って話すことにしています。(津田)

会員の広場（連載）

米国の統治の仕組みと大統領制、と建国の父たち（9）

佐川雄一

2. 建国の父たち（5）

2-5. ベンジャミン・フランクリン



ベンジャミン・フランクリンは、アメリカ独立宣言（1776年）の起草者の1人であり、独立戦争中、フランスと同盟を結ぶためにパリに赴き（1776年）、フランス政府と交渉、さらに1783年には、英国との間で合衆国独立を承認するパリ条約の締結など、アメリカ建国の歴史に大きな足跡を残した。しかし、ここに記す6人の建国の父たちの中では最年長であったため、80歳を過ぎても国家のために働き続けた。

ベンジャミン・フランクリンは、1706年1月17日、ボストンの貧しいローソク職人の家で、10番目の子供として生まれた。幼少時、学校に通学したこともあったが、大半は自己学習であった。10歳～12歳の時、父の職場

で徒弟として働き始めるが、間もなく、フィラデルフィアの異父兄が営む印刷業に転職する。それまでの熱心な自己学習が実って、この時点で、フランクリンは、上流社会の人たちと同レベルの学識を備えていたとのことである。

1724年、18歳でロンドンに行き、2年間、印刷技術を勉強、1726年帰国、フィラデルフィアで印刷・出版業を興す。その後「ペンシルベニア・ガゼット」紙を買収、発行者になる。ベンジャミンが、若い時に従事した印刷工見習いという仕事は、他人の文章を活字で組んでいく仕事で、知的な能力があれば、知識・文章力などを身につけることができたと言われる。

米国には印刷工出身の偉人が多い。ウォルト・ホイットマン、マーク・トウェインもいわば印刷所が大学であった。

印刷業で成功を収めた後、ジャーナリズムの世界だけでなく、電気の研究を始める。風を用いた実験で、雷が電気であることを明らかにするなど、科学の世界でも実績を残した。

政治では大陸会議の書記、議員、またペンシルバニア州行政参事会の議長を務めるなど、多方面で精力的な活躍をするが、必要なことはほぼすべて独学で習得した。アメリカ独立宣言は、トーマス・ジェファソン、ジョン・アダムズとともにベンジャミン・フランクリンが起草者として名を残している。

勤勉性、探究心の強さ、合理主義、社会活動への参加という18世紀における近代的啓蒙主義を象徴する人物であった。また、己を含めて権力の集中を嫌い、利己主義を厳しく律する人間性は、アメリカ社会で幅広い階層からの尊敬を集めている。

『フランクリン自伝』はアメリカのロング・ベストセラーの1つ。1731年フィラデルフィアにアメリカ初の公共図書館を、1751年 フィラデルフィア・アカデミー（後のペンシルベニア大学）を創設するなど公共事業・社会活動にも積極的に参加した。

ベンジャミン・フランクリンは、印刷・出版業者、著述家、科学者として成功を収めるが、50歳を過ぎてから、州政府を代表して英国政府との折衝、外交官としての道を歩み始める。建国の父たちの中でも異色の存在である。

- | | |
|----------|--|
| 1706年 | ボストンで誕生 |
| 1757－62年 | ペンシルバニア植民地の代理人として英国に在住、英国政府と交渉 |
| 1764－75年 | ジョージア・ニュージャーシー・マサチューセッツ植民地の代理人として英国に在住、英国政府と交渉 |
| 1775年 | 大陸会議のメンバー |
| 1776年 | 大陸会議のメンバー（70歳で独立宣言の起草にかかわる） |
| 1776－79年 | フランス在住 フランスとの通商協定の交渉・締結（70～73歳） |
| 1779－85年 | フランス大使（73～79歳） |
| 1783年 | パリで英国政府との間で合衆国の独立を承認するパリ条約の締結 |

- (ジョン・アダムズ、ジョン・レイと一緒に交渉に携わる)
- 1787年 合衆国憲法制定会議（81歳）健康に勝れず十分な活動はできなかった
- 1787年 ペンシルバニア州奴隷廃止委員会の初代会長に就任

1790年4月17日、フィラデルフィアで逝去、享年84歳。

中国人から見た

日本人の言語表現心理（4）

俞彭年

相手に和する

日本人が相手との和を保つために大変工夫をしたことがもう一つある。それは、会話において「相手に和する」こと、つまり相手の話しに調子を合わせることだ。会話をする人はお互いに相手の話に調子を合わせながら会話を進め、話を弾ませて、相手との和を保っていく。この仕組みが日本人の会話のパターンであり、日本人の会話を理解するキーワードだ。中国人が大変難しく思うのも実はこの仕組みなのだ。

中国人が日本人の会話を視聴していて、いちばん驚くのは日本人が頭を縦にさかんに振ること及びハイを連発することだ。つまり、相槌を打つということ。日本人の会話の仕組みを知らない中国人にとっては当然だと言えよう。頭を縦にさかんに振りながらハイを連発していくのは相手に和するためで、相手の話に調子を合わせているという印なのだ。中国人にはそれがわからない。欧米人がハイ、ハイを yes, yes と思って会話の意味を取り違えることはよく例としてあげられる。

中国人は会話で日本人のように相手に和するという意識はほとんどない。相手に和する意識は「随声附和」と言われ、自分の考えを持たない人間と見られてさげすまされる。会話は相手の意思を疎通することであるから、自分の思ったことを言い合えばよいのであり、相手の言うことに賛成・同意であれば頭を縦に振るか「是」あるいは「対」と言えば良いのであって、日本人のように頻繁に頭を縦に振ったり、ハイに当たる「是」とか「対」を連発したら「随声附和」になってしまうと中国人は思うのだ。

中国人が会話の中で言う「是」「対」には「はい、そうです」「そのとおりです」というはっきりと肯定する意味があり、日本語のような相手に調子を合わせているという意味はない。

初対面の会話は別として、日本人の普通の会話を視聴していて、中国人がおかしく思うことがもうひとつある。それは互いに「・・・ネ」「そうですネ」のようにネを頻繁に使うことだ。日本人の会話のパターンから言えば、これは相手に自分の話に和するように示していることと思われる。

辞書を引くと、ネの解釈はだいたい「相手に念を押すのに使う」とある。「相手に念を押す」とは相手に確かめさせること、つまり、自分の話したことに和するように相手に求めることになるのではないか。

したがって、お互いにネをさかんに使うのは、自分に和するようにと相手に求め合っているのである。先ほど「初対面の会話は別として」と言ったのは、初対面の相手にすぐに自分の話に和することを求めるのは普通失礼だと思われるからである。しかし、初対面の一通りの挨拶が済んで、何かの話題で話が弾んで、そしてお互いに気心が知れるにしたがって、ネがだんだんと使われる場面も少なくない。つまり、知り合うにしたがって失礼と思う意識が薄れていくのであろう。

中国人にとって日本語のネの意味を理解することは難しくはないが、日本人の会話のパターンでの使い方を理解し、使いこなすのは大変難しい。

中国人の若い駆け出しの日本語通訳によく見られることは、初対面の挨拶の通訳によくネをつかってしまうこと、そして初対面の日本人の客人との会話にすぐネをたくさん使ってしまうことだ。若い駆け出しの日本語通訳は日本人の普通の会話を視聴してよくそれをまねようとするので、あのような気になるネの問題が発生してしまうのだと思われる。

それから、彼等はネを使うと会話に親しみが湧いてくると思っている。確かにネをたくさん使った日本人の会話を視聴していると、会話をしている人たちの間に和気藹々が感じられる。

しかし、初対面の挨拶の会話と、知り合いとの間の会話とは心構えが違ふということを知らなければいけない。初対面の挨拶や気心がまだ知れぬ人との会話でネを連発したら、気味悪がられて、内心この人は少しおかしいのではないかと思われるのが落ちであろう。

駆け出しの若い日本語通訳からよく出る質問の一つは、それでは初対面の日本人と接触してどのくらい経ったらネを使ってよいのかというタイミングの問題だ。これは相手との心的距離にかかわる問題で、説明もしにくければ、理解もしにくい。のちに詳しく話してみたい。

中国語にも、日本語で相手に確かめてもらうときに使うネの意味に相当する言葉『是吧』がある。しかし、中国語ではこれをあまり使うと、押しつけがましく聞こえ、相手に嫌がられる。これは中国語の会話には日本語のように相手に和するという発想がないからであろう。

ここで翻訳の上での工夫を話してみたい。日本語の会話を中国語に訳すとき、日本語のネを忠実に一つ一つ訳していったら、その訳文の中国文は必ずなんとも変でおかしいと言われる。逆に中国語の会話を日本語に忠実に訳すと、ネが少ないかないかでぎこちなくなり、やはり会話の日本語としてはなんとも変でおかしいと言われる。したがって、ここでは工夫がいるわけだ。

日本語の会話を訳すときはネの本来の意味をよく体得して臨機応変に処理して訳し、そして訳さなくてもよい場合が結構ある。中国語の会話を日本語に訳すときは、逆に会話の意味に即して適当にネをつけると訳が生き生きとしてくる。この工夫を身につけるにはかなりの実践が必要となる。つまり、相手に和するという日本人の会話のパターンを理解し身につけることだ。

このように、日本人の会話は、一方ではハイを連発して頭を縦にさかんに振りながら、進んで相手の話に和していき、もう一方ではネを頻繁に使って相手に自分の話に和するよう求めていく。この構造とパターンは日本人に独特のものでなかろうか。したがって、中国人にとってはこの和するタイミングがたいへん難しく、理屈だけの勉強では習得できるものではない。日本人との長期間の接触と日本文化に慣れていく中で徐々に体得していくしかないと思われる。

それから、中国人は理屈好きであるから、こう推論する。つまり、日本人との会話は互いに相手に和していくのであれば、相手の要求などは拒否できなくなり、相手と異なる意見や考えは話せなくなってしまうのではないかと。理屈からいえば確かにその通りで、日本人の会話には反対や反駁や議論などができないことになる。しかし、現実には反対もすれば反駁もするし、相手の要求や依頼などを断ったりしている。これがまた日本語の難しいところだ。

これには日本人のほかの工夫があって、その工夫によって日本人は和するなかで拒否したり反対したり、相手と異なった意見や考えを述べたりするのである。

父の愛した ハルピン 辛い思い出の旅（1）

加藤幹雄

父は1992年8月に京都で亡くなったが、ハルピンは父が青春時代を過ごした町である。父はハルピンとこの町を作ったロシア人を終生愛し続けた。私は昭和13年(1938年)の2月にハルピンで生まれた。父の納骨の時に遺骨を分骨してもらい、丁度喉仏(のどはとけ)の所の骨を箱に入れ、父の位牌を持って1993年4月20日に成田を旅立った。母と家内の3人である。

ハルピン

ハルピン空港は町の西北にあり、町までは1時間程の距離である。北満独特の広々とした田園が見るものに開放感を与える。道の両側の並木が綺麗である。未だようやくつぼみが脹らみかけたところで、早春の侯である。でも気温は12度と暖かい。町に入った直ぐの所にロシア風の黄色い建物が目立つ一角があり、よく見ると建物に1956とか1957とかの字が彫ってある。おそらく中ソ蜜月の頃にソ連が建てたものであろう。母によればこのあたりは何もない畑だったという。

昼は餃子を食べた。餃子の皮が厚く懐かしい味である。父のハルピン学院の後輩で昨年物故された竹中重寿さんの手記の中に次のような一節がある。

「そんなある日(1946年2月頃)モストワヤ街を歩いていて、大学の先輩であり、特務機関時代の上官でもあった加藤中尉の夫人に出会った。加藤中尉は終戦少し前、上官に反抗したというので、朝鮮部隊に転属させられた。ハ

ルピンに残された夫人は 3 人の子供を抱えて敗戦後ロシア人家庭で針仕事を手伝ったり掃除婦をしたりして生計をたてていた。加藤夫人、3 人の子供達と屋台で餃子を食べた。上の男の子と女の子はよく食べたが、未だ口のきけない末娘は母親の膝の上で餃子の皮をしやぶっていた。この末娘が後に歌手として売り出した加藤登紀子である。」

(雑話「正論」所載 「私は生きて還った」)

私はこの日のことはよく憶えていないが、当時は本当にひもじかったから、どんなに餃子が美味しかったことだろうか。この時私は 8 才、幸子は 6 才、登紀子は 3 才であった。

昼食後、もう一日ハルピンで時間があるが明日の天気も分からないので、先ずスガリーに行くことにした。昨年できたばかりという有料道路でスガリーを渡り太陽島に向かった。河は乾期で水位が低く岸辺からは遺骨が流せないで、小さい遊覧船に乗って本流まで出て流すことになった。我々以外には若い二人ずつだけが乗客である。

本流にでると流れも早く、丁度対岸にヨツトクラブの見える辺りで位牌と遺骨をスガリーに流した。勢いのいい水流に乗ってあっというまに流れ去った。「おじいちゃんとうとう帰ってきたよ。」これで今回の旅行の仕事が果たせた。

骨の流れていった先には当時もあった鉄橋があり、丁度蒸気機関車が煙をたなびかせてハルピン駅の方角に向かって走って行った。北からハルピンに入るには必ずこの鉄橋を越えなければならない。当時沢山の難民が歩いてこの鉄橋を渡って、ハルピンに避難をしてきた。多くの人が力尽きてこの鉄橋から河に落ちたという。

太陽島を散策したが、当時は夏の別荘が並んでいて、夏はここで過ごした。そのロシア風の別荘が未だ残っている。もうかなり古い。でもかすかに往時の香をたたえている。今は会社の保養所になっているという。

未だ小学校にあがる前だったと思うが、太陽島で夏を過ごした時に、私は岸と船をつなぐ木製の細い栈橋に屈んで河を見ていたら、後をロシア人の若者が勢いよく駆けていった。反動で河に落ちてしまった。父が直ぐに飛び込んで救ってくれたが、その時の恐怖感は今でも憶えている。

山羊をからかっていたらいきなり山羊が襲ってきて必死に逃げたことも憶えている。手洗いはそのまま下が川になっていて、下にアヒルがいて餌が上から落ちてくるのを待っていた光景も妙に記憶が鮮明である。

父が 1981 年に出版した「風来漫歩」の中に次のような一節がある。

「ハルピンの楽しい思い出は尽きないが、毎年夏 6 月中旬から 7 月末にかけては、松花江対岸の太陽島に別荘を借りてここから会社(満鉄)に通うのが常だった。太陽島は空気が清く澄んでいて草原が美しく、さわやかな風に満ちていた。さんさんと降り注ぐ光の中に嬉々として遊び戯れるわが子を見ることは私たち夫婦にとって何ものにも代えがたい喜びだった。

松花江の水は薄茶色で濁って透明ではないが、ソーダ一分が多いため石鹸がよく溶け、水浴して身体を洗うとサバサバして実に爽快な気分になる。毎朝 5 時頃に起きて水浴し、ゆっくり朝食をすませたあと 7 時頃ボートを漕いで対岸まで 20 分、バスで 30 分で会社に着き、8 時から仕事にとりかかる。週末は同僚のロシア人とヨットを借りてピクニックに興じたこともあった。」

私がハルピンに生まれてから引き揚げまでの間、目まぐるしい引っ越しの繰り返しである。母に確かめてみると、

1988 年 2 月私が生まれる。大和アパートという新築のアパートに住んでいた。ハルピン南崗(なんがん)地区の線路沿いにあった。これは今でも残っていた。”

1939 年の夏に太陽島の別荘に転居。”水害で住めなくなり秋に馬家溝(まじやごう)の近くの公園の前のロシア人トホールさんの家に間借りをする。

1939 年秋、幸子の出産のために京都に帰郷。母の里の新町六条に住む。

1940 年 1 月幸子が生まれる。2 月に加藤の祖母が亡くなる。同年 3 月ハルピンに戻る。暫らくトホール家に居たが、子供が二人で狭いので秋に近くのイワノフさんの家に引っ越す。これは馬家溝の電車の終点の近くにあった。

1941 年 6 月、父が召集になり京都に戻る。北区の玄以町に住む。

1942 年秋に父がハルピンに転属になったのでハルピンに戻る。大直街と遼陽街の角近くに住む。これは軍のアパート。

1943 年 12 月 登紀子生まれる。

1944 年 4 月私が白梅小学校(当時は国民学校と呼んだ)に入学

同年 10 月父の転属により奉天(今の沈陽)に越す。町の中心にある千代田公園の近くのアパートに住む。私は千代田国民学校に転校。

1945 年 6 月父が朝鮮部隊に転属になったのでまたまたハルピンに戻る。

大直街と文明街の角近くのアパートに住む。これも軍のアパート。ほびなく父は北鮮に応召。私は白梅国民学校に戻る。

同年 8 月 8 日ソ連参戦。15 日敗戦。

23 日にアパートを出てハルピン女学校の寮である星輝寮に移る。軍隊の留守家族がここで集団生活をする事になった。

同年 11 月に親戚の山内家に移る。星輝寮の生活では食糧や燃料も不足しておりまた安全上も危険になったからである。山内家はキタヤスカヤ街

(今は中央大街と呼ばれる)の近くの外国3道街にあった。

1946年9月ハルピンを引き揚げる。同年10月京都に帰る。

住んだ場所だけでもII箇所になる。母によれば父は大体引っ越しの手伝いはしなかったというからこの引っ越し続きは相当に大変だったらしい。だから母は引っ越しの名人である。

敗戦後のドサクサの中で家族4人が生き延びられたのは専ら母の英知や決断によると思う。母がロシア語が出来たこと、洋裁が出来たことがどれ程力になったことだろうか。母は1915年生まれだから未だ30才代の若さである。

(つづく)

「静聴雨読庵より」(8)

尾関陽四

プルーストをフランス語で読む

プルースト『失われた時を求めて』はわが国で依然として人気が高く、個人訳が、現在進行中の2種を含めて、4種も存在するという活況ぶりである。新たに翻訳進行中でもなく完結が見速まれる吉川一義訳の岩波文庫版を読んでみようかと思ったが、いや待てよ、思い切ってフランス語の原文で読んでみようか、という気になった。ちょうど、一緒に読んでみたいという同好の士が現われたので、この無謀とも思える詰みに挑戦することにした。

まず、版本の選択から始めた。プルーストの著作権が消滅したのを機に、『失われた時を求めて』の出版が雨後の筍のように現われ、版本の選択も容易でない。友人の書誌研究家・久田さんを煩わせ、各種版本の比較検討を行った。

もともと、著作権の切れる前から出版権を持っていたガリマール書店の版が最も信頼のおける版として、わが国の研究者などの間でも定評があるが、何と、現在ガリマール版には4種の版があることが判った。

新プレイアード叢書版(1987-89、全4巻)

Collection Folio 版(1988-90、全7巻)

Collection Blanche 版(1992、全7巻)

Collection Quatro 版(1999、全1巻)

いずれも、J-Y Tadie の監修になるものだ。

久田さんから教示いただいた4種の比較検討の結果は以下の通り：

新プレイアード叢書版：研究者間で評判が高い。注釈が豊富。価格が高い

Collection Folio 版：注釈が豊富(新プレイアード叢書版とは違うらしい)。一篇1冊。ペーパーバックで、価格が比較的安い。

Collection Blanche 版：注釈が無いか少ない。一篇1冊。フランス装で、汚れやすい。

Collection Quatro 版：注釈が無いか少ない。全篇1冊。薄紙のペーパー

バックで、長期間の使用に耐えられない恐れ。最も安価。

なお、本文テキストは4種とも同一であるらしい。

久田さんの紹介では、他にも、G.F. Flammarion 版(1984-2002)や

Livre de Poche 版(1992-2009)もあり、特に、G.F. Flammarion 版は注釈なども豊富で、お勧めとのこと。

上記比較検討の結果、Collection Folio 版を選択することにした。

各篇に半年かけて、3年半で読み終えられれば幸いだ。また、並行して、吉川一義訳も参照することにする。(2018)

160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人(3)

臺 一郎

この国には貧乏人はいるが荒廃した貧困はない

日本を初めて訪れた西欧人達が大いに驚き、また感心したのは、当時の日本社会で最下層に属すると思われる人々の多くがその貧しさにも拘わらず表情は明るく、性格は陽気で、しかも総じて満ち足りた幸せそうな表情をしていたことであったようだ。

ハリスやオールコックなどの主要国の外交官や、英国の日本研究者で後に東京大学名誉教授ともなったバジル・ホール・チェンバレン、或いは大森貝塚の発見で有名な米国の親日派動物学者エドワード・モースなどは、こうした日本の民衆や下層階級の特徴から、「日本という国にも貧乏人はいるが、その貧しさには非人間的な悲惨さや精神的な荒廃が見られないという点で欧米や他のアジア各国との大きな違いがある」と指摘した。

すなわち、チェンバレンは著書『日本事物誌1』の中で日本社会について「金持ちは高ぶらず、貧乏人は卑下しない。実に、貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない」と紹介した。また英国のオールコックは著書『大君の都』の中で、初代領事として赴任した神奈川近くの農村で目にした農民たちの暮らしについて「住民の間には贅沢にふけるような余裕はほとんどないにしても、飢餓や窮乏の兆候は見受けられない」と述べ、さらに「幕府のあのノロノロとした役人に比べて、このきびきびとして働き、明るい顔で質素な生活を送っている庶民たちのなんと好ましいことか、彼らは上の身分に近づこうなどという野心もなく、肥沃な土地と美しい風景に恵まれて満ち足りた顔をして暮らしている」と書いた。

初代米国領事のタウンゼント・ハリスも、最初の赴任地下田の米国領事館からほど近い漁村柿崎の印象を、著書の『日本滞在記』の中で「柿崎は小さくて貧寒な漁村であるが、住民の身なりはさっぱりとして態度は丁寧である。世界のあらゆる国で貧乏にいつも付き物になる不潔さというものが見られない」と感心している。

徳川幕府の要請で長崎海軍伝習所の2代目の教官を務め、勝海舟などに海

軍教育を行ったオランダの軍人ファン・カッテンディーケは、著書『長崎伝習所の日々』の中で、幕末の日本の百姓が貧しいにも関わらず幸福そうに見える理由などについて以下のように考察している。すなわち「百姓はその所得の五分の二（40%）を、国家または藩主に献じ、さらに残りの少なからぬ部分をお寺に貢いでいる。だから百姓の手に残るのは、まことに僅かだ。日本人のように勤勉な国民がなぜ貧乏をしているのかの理由もこれで判る。しかし百姓どもはそれでも満足し、幸福に見受けられる。百姓達の欲は至って僅かなのだ」と。彼は百姓たちの欲のなさこそがその理由なのだと推察したのである。

1860年と61年に、幕末の日本を訪れた英国の世界的な植物採集家で園芸学者のロバート・フォーチュンは、著書の『日本探訪記』において、江戸近郊の田園風景を紹介した文章の中で「美しい丘、谷間、広い道、日陰のある小道、そして家々や庭などで見かける人々は、勤勉で労苦にくじけず、明らかに現状に甘んじて満足している」と感心した。

この他、米国の動物学者エドワード・モースも、著書『日本その日その日』の中で、日本での貧困が同時代の欧米での貧困とは明らかに様相が異なることを指摘した。彼は明治10年に日光への旅で立ち寄った栃木県の貧しい農村の印象を、「人々は最下層に属し、粗野な顔をして、子供は不潔で、家は貧弱であった。しかし彼らの顔には、米国の大都市の貧民窟で見受けられるような、野獣性も悪性も憔悴した絶望の表情もなかった」と紹介した。

やはり明治10年に日本を訪れた英国の女性旅行家イザベラ・バードは、著書の『日本紀行』において、関西訪問の折に伏見の街から郊外部に向かう沿道で目にした貧しい農村の様子を「みすぼらしくて狭苦しくて煤けた家のほぼどれもが、寺院の園丁さえもが羨ましがるような大輪の菊の花を少なくとも一輪咲かせているのです」と貧しくとも花を愛でる心の豊かさを失わない日本人に感心した。

この時期、欧米では第二次産業革命が進行し、資本と生産の持続的な拡大が進む一方で、社会の階層間の経済的格差はむしろ拡大し、最下層では非人間的で悲惨な貧困化や精神の荒廃が進んでいた。明治4年（1871年）に米国及び欧州各地を視察してまわった日本政府の岩倉使節団は、ロンドンでも市内各地を訪ずれた。使節団の副使で政府参議の木戸孝允は、悪名高い貧民街イーストエンドを訪れた際の感想を「貧民窟というよりは悪漢の巣で、その状態は言語を絶するというほかはない。シナ人も二・三人いたが、アヘンを吸い賭博などをしていた。幸い日本人がいなくてよかった」と語った。

幕末までの我が国は、徳川幕府による強力な鎖国政策により、西欧における産業革命の進展や階層間の経済格差の拡大、さらにはそれらがもたらす貧困層の悲惨化や精神的な荒廃の進行とはほぼ無縁でいられたのかもしれない。

さて、今回原稿の末尾に、明治初頭に日本を訪れたフランスの実業家エミ

ール・ギメが著書『1876 ボンジュールかながわ』の中で述べている日本社会の印象を紹介する。

彼は『大それた欲望を持たず、競争もせず、穏やかな感覚と慎ましやかな物質的満足感に満ちた生活をなんと上手に組み立てることを知っている国民なのだろう』と深く感心した。何よりも欲張らず、大それた野望を持たない当時の我が国庶民の国民性が、貧しさを悲惨で精神の荒廃した貧困にしなかったのかもしれない。

文化講座・講演会

奈良興寺文化講座 2019年7月18日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講

「東南アジアの仏教」 興福寺執事 辻 明俊

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

第108回 新三木会 講演会のご案内

1. 日時 7月18日(木) 13時～ オリオンルーム
2. 講師 森信茂樹氏 中央大学大学院教授 東京財団上席研究員
3. 演題 『消費税と我が国の経済、財政について』
4. 申込 Eメール：shinsanmokukai@gmail.com
電話：070-6994-0137 フルネーム・卒年・所属(紹介者)記入。

天地シニアネットワークで申し込んでください

5. 会費 一般2千円、婦人千円、学生(院生)無料、茶話会ありません
6. ホームページ <http://jfn.josuikai.net/ircle/shinsanmokukai/>
7. 今後の予定

第109回 8月15日(木) 『昭和史から学ぶ教訓』

保阪正康氏 日本近代史・歴史家・ノンフィクション作家

第110回 9月19日(木) 『揺れ動く朝鮮半島情勢』

平井久志氏 ジャーナリスト 元共同通信社ソウル支局長

第111回 10月17日(木) 『ブラックホール撮影、宇宙の話』未定

村山 斉氏 素粒子物理学者 カブリ財団会長

事務局

<投稿>を歓迎します。

<プリント版・郵送>

メール版を編集してプリント版を月に1回発行郵送しています。

お申込みくださればお送りします。一応、実費として月@350円(4200円/年)をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先>三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・496号

発行：2019年7月1日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651